

## 研究の背景・目的

後志森林管理署国有林において、苗木が捕食される獣害が発生した。平成30年度、令和元年度の植栽箇所で現地確認を行ったところ、33ha、5万本の苗木が被害を受けていた。苗木は枯死に至らないものの、当署においては過去類を見ない規模の被害であり、適切な森林管理を行うために、原因の究明を行い対策を講じる必要があると考えている。本稿では、主に被害状況の把握、原因について述べるが、本研究は数力年にわたって実施することを予定しており、本稿をその第一報と位置付け、今後の研究の展開についても考察を行う。

## 研究の内容・成果

### 〈被害の概要〉

平成30年度、令和元年度の植栽木の被害状況を図1に示す。被害はカラマツ、クリーンラーチに限られ、トドマツの被害はなかった。地区によってはカラマツ、クリーンラーチのほぼ全量が被害を受けている。写真1、2のとおり、幹の先端が斜めに切られており、エゾユキウサギによるものと推測できるが、フン、足跡等の痕跡が見られず、また、被害が大きい地区ではエゾシカが頻繁に目撃されており、エゾシカによる被害であることも考えられた。

### 〈雪上観察・自動撮影〉

原因となる動物を特定するため、足跡などの痕跡が残りやすい降雪後に現地確認を行い、定点カメラによる自動撮影を試みた。

写真3のとおり、定点カメラによりエゾユキウサギの生息が確認でき、雪上に残る痕跡によりエゾユキウサギが苗木を捕食していることが明らかとなった(写真4、5)。また、雪上の痕跡からエゾユキウサギの行動パターンが推測できる(図2、3)。降雪により草本類が雪に覆われ食物が減少する時期に、雪上に出ている苗木を捕食しているようで、苗木が降雪で完全に隠れる期間は、被害がなくなると推測できる。なお、一晩での被害は数本であるが、毎日繰り返されることにより被害が拡大する。

### 今後の研究の展開

「①被害を受けた林分が今後どうなるのか」「②今後植栽する林分についてどのような対策を行っていくのか」二つの視点で検討する。

①については、過去の事例を見ると、被害を受けても枯死せず成林するようである。写真2のとおり、被害を受けたものは枝が上部に伸び、幹に変わろうとしている。幹が肥大成長し伐期を迎えるころには、この被害の履歴は木部に埋め込まれるであろう。ただし、繰り返し被害を受けたときにどのように成長するのか。②については、忌避剤の散布等も考えられるが、経費削減を踏まえると適地適木を考慮することであろう。被害が想定される箇所では、トドマツを植えるといった対処が最も効果的と思われる。図1のとおり、被害の発生には地域性があるように見え、被害の発生地域を特定できればそれも可能となる。また、今回の調査は国有林のみを対象としたが、聞き取りを行うと民有林においても同様な被害が発生しているようである。この問題を国有林野内でのみ検討するのではなく、民有林を含め地域全体で取り組むことも必要と思われる。以上を踏まえ、図4のフロー図のとおり今後の研究を展開していく。

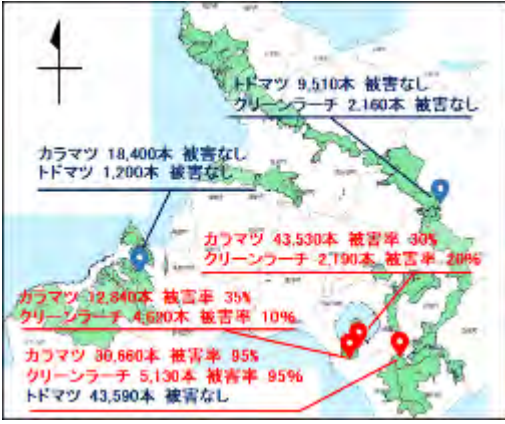


図1 H30年度・R元年度植栽木の被害状況



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

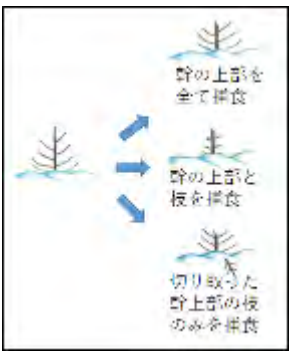


図2 エゾユキウサギの捕食状況

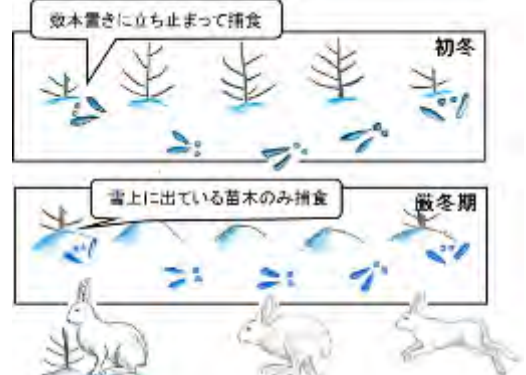


図3 捕食時の行動パターン

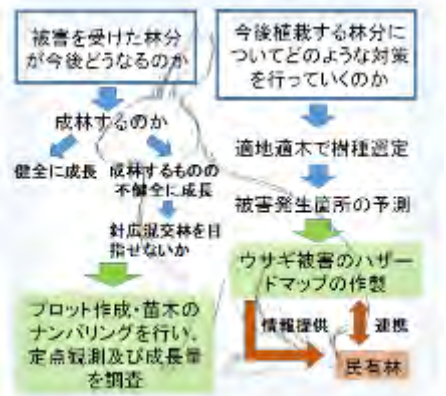


図4 今後の研究の展開